

煩惱をすてずに（その一）

釈尊の懺悔

仏教では釈尊の御在世当時から布薩会（ふさつえ Uposatha）という行事がおこなわれていました。布薩会というのは、判りやすくいえば、個人と教団の純潔をまもるための、反省会だとか懺悔会といったような式事でした。

ことの起こりは、釈尊が悟りを開かれて布教伝道を開始された間もない或る日のこと、釈尊に帰依していたマガダ国のビンビサラ大王が、

「仏教の教団も、発足当時より、次第に形が整えられて来た。ところでインド在来のバラモン教団では、毎月六回、多くの僧侶や信者の合同集会が

日 高 白 象



開かれている。この集会では、僧侶は法を説きあつて互いに研鑽し、信者はこれを聴いて信心を深め、仲間をさそつて信者をふやしている。こうしてバラモン教団では、この種の集会を数多くたび重ねることによつて、おのずから拡充している。

勿論、仏教の教えがバラモンの教えよりもすぐれていることはいうまでもない。だが教団の運営上、バラモンのこうした行事のやり方を見習うのも良いことではあるまいか。それによつて仏教教団も一層発展するのではあるまいか」と提唱したのに対して釈尊が、

「それは良いことだ」

と採諾されたことにもとずいています。

これまで教団成立の日も浅い積尊のもとにあつては、ただ積尊一人が仏陀として随時随所に法を説かれるだけであつて、定期的に説法の集會が開かれることはありませんでした。まして仏弟子同志が積尊のみ前にあつて、自分の領解した真理を説きあう、ということもありませんでした。

思うに人間の精神というものは、自分だけで自分の心の中にしまつていただけでは、浮遊するもののように流れがちであつて、まだまだ自分自身の本当のものであるとはいいかねない場合も少なくはありません。ところがこの自己の内なるものを他に対して外に表現することによって、起きて来る反応や反響、それはどういう形のものであつても、その反応や反響と共に、ひとたび内より外へ出たものが、再び内へ帰つて来ることによって、はじめてそれを自分自身のものとして確認するこ

とが出来たのです。反応や反響が大きければ大きいほど、またその確認も深く強いものであるはずです。

仏教における精神的な領解や悟りといった場合も同様です。積尊の教えを、ただ耳に聞き、心に思つただけでは觀念の遊戲にすぎません。その教えを他に対して言葉として伝えようとする対決、実践しようとする行動、その意欲的な表現、表現のつきかさね、それによって積尊の悟りの内容そのものが、積尊の教えを媒介として、はじめて自分自身のものとなつて来るのです。

積尊は、ビンビサラ大王の提唱を採諾されて、教団の月例行事に布薩會をもうけられました。然し、せつかくもうけられた布薩會の席上、みずから法を説き、人とも語りあふことの出来る仏弟子は、一部の有能な、ごく少数の者に限られていました。どの集會でもそうですが、集會という以上それは、全員の發言の場であつて、一部の者に独

占された形になってはいけません。そこでその後
の布薩会は、一人の有能な仏弟子が波羅提木叉（は
らだいもくしや Patimokkha）という戒本を誦し、
他の仏弟子たちはこれを聴きながらみずからを反
省し、もし戒に抵触したことのあった場合には、
満座の前で懺悔するという形式に改められたので
す。

またその回数にしても、寺院に定着していたバ
ラモン教団にあつては毎月六回の開催も可能であ
つたでしょうが、一個所に定着することをいまし
めて常に布伝道の旅の中にあつた仏弟子たちの
教団にあつては、数回にわたる集會も自然不可能
となり、何時しか半月に一回、月の十四日か十五
日に行われるように改められています。

こうして布薩会は、人生と仏道における、個人
と教団の、その純潔をまもるための反省懺悔の場
として、釈尊御在世中は一月も欠かすことなく継
承され、またその純潔を期すること更に切要とさ

れるにいたつた釈尊滅後の教団にあつては、ます
ます重要な行事となつていったのでした。

今日の仏教教団の中にあつては、どの宗派教団
においても、どの寺院教会においても、布薩会ら
しき面影すら残っていませんが、それはおそらく
人生と仏道における純潔、個人と教団における純
潔、それをまもろうとする意欲と反省も持ちきら
ず、汚濁に麻痺した無道心をさらけ出しているも
の、といわれなくもありません。

また今日の仏教々々の中にあつては、既成教団
といわず新興宗教といわず、管長・大僧正・教祖
・会長といったような特権階級があつて、その教
団を統制し支配しています。そして教団の組織が
大きければ大きいほど、勢力が強大であればある
ほど、その権力も絶大化しています。たとえそれ
らが民主主義・合議主義の上にたてられた教団の
象徴であつたとしても、その特権意識はぬぐうべ
くありません。

然るに釈尊御在世当時の教団にあっては、一人の支配者も特権者もいませんでした。釈尊自身としても無差別平等な教団の中の一人にすぎず、特殊な立場ではありませんでした。食べ物ものも飲みものも仏弟子たちと同じものをわかちあい、着るものも同じ粗末は糞掃衣でした。布教の旅の中に寝る宿も、多くは林の中の樹の下の草の褥でした。仏弟子たちはその周囲の樹の下で三々五々に寝ころんでいました。長い長い旅の道でも釈尊は仏弟子と共に素足で歩いていました。

「善き友よ」

釈尊が仏弟子に呼びかける言葉は、何時もこうでした。そこには弟子・師匠という差別さえありませんでした。後世、善き指導者とか高僧という意味をもつにいたった善知識という言葉は、実はこの「善き友よ」と呼びかけられた釈尊の人間平等感から転用されたものにすぎません。

一人の特権者も支配者もいなかった釈尊の教団しかしその中には釈尊の人格が横溢し、釈尊の人

格を通した正法は、人ごとに実践躬行され、教団そのものが釈尊の人格と正法を中心とした上求菩提の求道の場、下化衆生の伝道の場、文字通りの道場であったのです。釈尊の行かれる所、教団のある所、たとえそこが園の中であっても、林の中であっても、或いは山谷曠野の中であっても、みな悉く道場であったのです。

これにくらぶれば今日のどの宗派にしても教団にしても、釈尊御在世当時の教団の面影は少しもありません。躍動しておるべき仏教本来の生命は壮大な伽藍と巨大な組織の中に枯渇し、ゆがめられ果ててしまっています。それは一に、慕うべき釈尊の人格を見失い、行うべき正法を踏みあやまったためにほかなりません。

またこのために教団として本来あるべからざる特権者・支配者なるものが、管長・大僧正とか教祖・会長といった聖職の美名を騙かたってあらわれてきています。然しこうした特権制度意識というも

のも、所詮、ゆがめられた教団を、ゆがんだままに運営しようとして施策された俗権意識と何ら異ならないものでありましょう。およそかかる俗権意識の中には仏法はありません。ひとたび管長・大僧正とか教祖・会長といった猊座につくや、大衆を見おろして仏法らしき言葉をつらねた説教のひとつくさりでもしようかといった増上慢者の、その心の中に仏法のあるはずはありません。むしろ彼等は、ゆがめられた教団の頂点に立っているため、正法の実践者があらわれるや、それを憎んで迫害しようとする三類の強敵の中の、潜上増上慢と化する可能性があるのです。

然るに釈尊は、唯我一人の仏陀であられながらいや仏陀であるればこそ、日々夜々、常に、より一層深き懺悔に徹していました。月々に行われる恒例の布薩会の時のことです。一座を代表した仏弟子の一人が、教団で定められた戒律の一つ一つを読み上げてゆきました。これにもとずいて一座の者が次々に立って、自分の犯した罪、犯そう

とした罪については、みずから告白して懺悔し、また自分で気付かないでいる罪については、他の仏弟子たちに自由に指摘してもらって、懺悔する運びとなりました。

この時です。誰よりも先に、静かに懺悔の席に立った人がいました。それはほかならぬ仏陀釈尊でした。釈尊は合掌した手を高く上げて、仏弟子たちに問いかけました。

「我が友よ、私は今、みずからすすんで汝等に尋ねたい。何ぞ私の言葉や行爲において、批難すべきことを気付いた者はなかつたらうか。もしも気付いた者がいたならば、私のためにそれを指摘して欲しい。私はここで懺悔したい」

それは深い深い湖の底より湧き出て来るような澄みきった声でした。しかもその声には、自分自身の一瞬の眼の動きの中にも、指さき足さきの動きの中にも、一点の曇りさえ見のがすまいとする厳しさが秘められていました。しばらく沈黙が流れました。沈黙は批難すべき何ものもないことを

意味していました。然しこうした沈黙の中には、
「世尊は正覚の仏陀であられる。仏陀にはもはや
反省すべき微塵の煩惱もなく、懺悔すべき微塵の
罪業もあるはずはない。然るに世尊は、何故かく
も懺悔されようとするのであるか……」

と、いぶかしがった仏弟子もいたことでしょう。
また中には、

「懺悔すべき何ものもないはずの世尊が、あえて
懺悔しようとされるのは、我々仏弟子のために懺
悔の範を示し、それによって我々が、心から切実
に懺悔することを、すすめられているのではある
まいか……」

とも勘ぐった仏弟子もいたことでしょう。深い
沈黙の中で、懺悔したいという釈尊の言葉は、同
じように三度くりかえされました。然し誰一人と
して答える者はありませんでした。時に有能な仏
弟子の一人が、座を立てて釈尊を礼拝し、あふれ
る感動に語尾をふるわせながら申しました。

「世尊よ、我等は世尊の言行について、批難すべ
き何ものをも気付いたものではありません。世尊よ

世尊は、いまだ生ぜざりし道を生ぜしめ、いまだ
知られざる道を知らしめ、いまだ説かれざる道を
説きたまい、誠に道の生者、道の知者、道の導師
であられます。我等は今ひたすらに、その道を尊
び、その道に従い、その道に赴むかんとするばか
りであります」

釈尊は深くうなずかれました。満座の中には、
地底よりゆすぶるような大いなる感動が湧き起こ
りました。そして布薩会は次々に立って告白懺悔
する仏弟子の上にくりひろげられてゆきました。
それは何とおごそかな麗しき情景であったこと
でしょう。釈尊の崇高な温かき人格が、すべての仏
弟子の一人一人の、魂の中にしみ通り、皮膚にも
あふれ、言行として躍動していました。教育とは
まさしく人格をもととした感化。布薩会は釈尊の
人格感化の坩堝であったのです。

然しここで刮目しなければならぬことは、釈
尊その人が、仏陀として教団最高の地位、別格の

地位にでもあるべきはずであるにもかかわらず、それを否定して、なお教団の中の無名の一求道者と何ら変わらない立場に身をおかれていたということ、そのみならず布薩会に際しては、誰よりも先に立って、列座の仏弟子を合掌礼拝しながら「私に過失あらば、指摘して欲しい。私は懺悔したい」

と、その言葉を三度もくりかえされたということです。ここに仏教教団本来の一切平等にして謙虚なる在り方が、布薩会における積尊の姿を通して、もつとも具体的に、もつとも端的にあらわされている、ということが出来ましょう。

それにしても積尊は、この布薩会に伝えられているように、本当に懺悔しようとしたのでしょうか。もしそれが真実であるならば積尊自身、懺悔しなければならぬ過失を、知らず知らずの中にも犯していたのではないかとみずから思っておられたのでしょうか。このことは、

「仏陀でも過失を犯すことがあります」

ということを物語っているものなのでしょうか。そういう人でも、なお仏陀といわれるのでしょうか。それとも、積尊が仏陀であられたことも事実であり、また積尊がみずからすすんで懺悔しようとしたことも事実であると認めるならば、

「積尊は仏陀であらるればこそ、懺悔に徹しておられたのである」

と、みるべきものなのでしょうか。若しこれにもとずくならば、

「懺悔なき仏陀は、真実の仏陀ではない」

と、いうことも可能なのでしょうか。仏陀の懺悔——それは一体どのような原理にもとずいているのでしょうか。

思うに積尊の生涯における懺悔は、ただ布薩会の時ばかりではありませんでした。インドの国では四月から七月にかけて夏三ヶ月のあいだ大へんな雨期が過ぎます。雨期のあいだは伝道布教の旅も困難でした。そこで、それぞれの地方に布教していた仏弟子たちは積尊のもとに集まって、自

分自身の修行に専念しました。教団では、この期間の修行を夏安居（げあんご）とも雨安居（うあんご）とも称しました。夏の雨期のあいだ安らかに住居したからです。そしてこの安居のあけた七月十五日には、自恣（じし pavarana）という行事が開かれました。それは毎年一回、必ず開かれた教団の年中行事でした。

自恣というのは、安居三ヶ月のあいだに犯した罪を、互いに告白しあい懺悔しあうことであって、その様式は殆ど布薩会と同じようなものでした。然しその規模においては、釈尊に常随していた仏弟子のほか、インド国中の各地に布教していた幾多の仏弟子までも、八方から参加したものですから、それは布薩会にもまさる大掛かりなものとなっていました。参集した仏弟子の中には、おそらく幾月ぶりかに顔をあわせた者も少なくはなかったことでしょう。そして互いに懐旧の情をあたためあつたことでしょう。

この自恣の席上、釈尊は布薩会の時と同様に、誰よりも先に座より立ちあがり、合掌の手を高くかかげて、

「我が友よ、安居三ヶ月のあいだに私が犯したかも知れない罪やあやまちに気付いた者はいないか若し気付いた者があれば指摘して欲しい。私はこの場で懺悔したいと思う」

と仰せられたのです。仏弟子たちの沈黙も布薩会の時と同様でした。そしてこの沈黙を破つたのも、布薩会の時と同じく一座を代表した仏弟子の釈尊を讃嘆した言葉であつたのです。

こうして自恣の行事が終わると、安居は解散され翌る七月十六日には、仏弟子たちは再び、それぞれの地方布教の任につくべく旅立ちました。旅立っていく仏弟子たちの心はおそらく、雨期三ヶ月ものあいだ、親しく釈尊のみもとにおいて修行した充実感にあふれ、自恣による懺悔によって身も心も洗い清められて、大いなる伝道悲願にもえ立っていたことでしょう。

ところで自恣の行われた七月十五日といえばいうまでもなく盂蘭盆会（うらぼんえーお盆）の日のことです。お盆の起こりというのは、釈尊の十大弟子の中でも神通第一とうたわれた目蓮尊者が、餓鬼道におちて苦しんでいる母の霊を、安居三ヶ月の間、日々夜々一心に、自分の神通力で救おうとして、遂に救うことが出来ず、自恣の席上、涙ながらにこのことを告白して、みずからの不幸の罪と、不徳の科（とが）とを懺悔しました。この時、釈尊は次のようにさとされました。

「神通力だけでは究極の救いとはならない。救いは仏道のほかにない。また同じ悪業の因縁で苦しんでいる多くの人々の中で、母だけを救おうとしたこともあやまつている。母だけでなく、母と同じ因縁で苦しんでいる六道の、すべての人々をも救おうとする大慈悲心、この平等の大慈悲心にもとづく行為によつてはじめて究極の救いがおとずれる」

目蓮尊者をはじめ居並ぶ仏弟子たちは歓喜しました。そしてさつそくこの教えに従って四衆供養

をいとなみました。お盆の起こりは、ここに由来していると伝えられています。

我が国のお盆は、こうした仏教の故事と、我が国古来の祖先崇拜の思想とが融合して、今日でも信仰の如何にかかわりなく、国土の麗しき風俗として伝承されて来ています。お盆の行事に先祖の供養をすることは、いうまでもなく尊いことであり、行わねばならない大切な仏事ではあります。

しかしながら、ここでふりかえって考え直してみなければならぬことは、お盆の起こりというもの、実は七月十五日の自恣の仏事の中の出来ごとであったということ、そして自恣そのものが仏教徒自身の、人生と仏道修行上における各自の罪と過失を告白懺悔しあい、個人と教団社会における純潔を守る、ということを主体としたものであった、ということなのです。

従つてお盆においては、ただ祖先に感謝供養す

るということにとどまるだけでなく、このお盆の時こそ、釈尊御在世當時における自恣の根本精神にたちかえって、家庭においても寺院教会においても、仏教徒としての自恣の行事を復活させねばならないのではないでしょうか。今や枝葉末節に墮ち入り形斃化した現代仏教を、本来のものへ復活蘇生せしめる道も、実はこの平凡な日常生活の中の、そうした行為の中にこそあるのではないのでしょうか。

釈尊は、布薩会や自恣のたびごとに懺悔しようとされただけではありませんでした。八十才の二月十五日、クシナガラ城外、沙羅双樹のもとで御入滅されようとした時も、またそうでした。

釈尊のご臨終の間近いことを聞き知って、驚いて馳せ参じた多くの仏弟子や信徒に対して釈尊はこれまでに説き残されていた教えの悉くを、説きつくされました。救うべき最後の人までも救われました。さすがに釈尊は疲れていました。臨終の

時はいよいよ迫りました。この時このように申されました。

「我が友よ、私は今まさに私の生涯を終わろうとしている。ここに私は、私の八十年の生涯をかえりみて、懺悔すべきことがあれば、それを悉く懺悔し尽くしたい。我が友よ、私の生涯において私が犯したかも知れない罪や科に気付いている者があれば、それを今この場で直ちに私に指摘して欲しい。私はそれを悉く懺悔し尽くして、私の生涯を終わりたい……」

仏弟子たちは沈黙に代わって、ただ悲泣慟哭するばかりでした。悲しみのあまり自分の頭をたたき地に泣きころぶ者もいました。釈尊は三度同じ言葉を静かにくりかえされました。これにこたえたものは仏弟子を代表した阿難尊者の、釈尊をたたえ釈尊との別れを悲しむ嗚咽の言葉でした。釈尊は大きくうなずかれました。そして臉を閉じられました。

思うに釈尊が誰よりもさきにもみずから懺悔しようとしてされたのは、恒例の布薩会や自恣会の時ばかりでなく、日々夜々片時にも厳しく自己をかえりみられて、懺悔しようとしていたのではなかったでしょうか。そしてそれがまさしくそうであったればこそ、臨終のまぎわにおける一期八十年の生涯をかえりみられた総懺悔の言葉として集約されたのではないのでしょうか。

釈尊は仏陀であられながら、なお懺悔に徹していました。いや仏陀なればこそ、凡人も及び難い懺悔の心を堅持されてきました。たとえ兎の毛でつづいたほどの罪・科さえなくとも、大衆に訴えてまで、それをたずね、それをゆるがせにせず、懺悔しようとしてされたのです。

これは一体どういう理由によるのでしょうか。仏陀でさえも、罪や科を犯さしめる根源的煩惱の根は断たれてはいない、いな断つことは出来ない、ということなのでしょう。

結論に入る前に、次に「聖者の懺悔」の例として日蓮聖人の場合とイエス・キリストの場合とをふりかえってみましょう。
〔以下次号〕

